

2019年1月25日

主査 宮原 哲

副査 鳥越千絵

副査 伊藤彰浩

## 博士學位論文審査報告

芳野弥生

「日本の高校生の自己観と異文化コミュニケーション能力育成に  
英語教育が与える影響 ―高校生・教師の CLIL への認識を通して―」

### 【研究の背景と概要】

文部科学省が「グローバル人材育成」に向けて発表する文書には必ずと言っていいほど「グローバル人材とは外国語（英語）でのコミュニケーション能力を持ち、異文化理解・活用能力がある者」という文言が含まれている。さらに、「グローバル人材育成推進会議」の2011年発表の中間報告によると「グローバル人材」とはI. 語学力：コミュニケーション能力、II. 主体性、チャレンジ精神、協調性、責任感に加え、「III. 異文化理解と日本人のアイデンティティ」を持つ者とされている。

このうち、語学（英語）力の習得と、「日本人のアイデンティティ」との間の関係が近年取り沙汰されることが多くなってきた。英語を使ってコミュニケーションをすることによって、世界の多くの国々、文化の人々と交流をしたり、ビジネスをしたりすることが容易になることが予想される一方、英語的な認識や人間関係観などを体得することによって、日本人としての「アイデンティティ」が果たして保たれるのか、英語が上達すればするほど日本人としての自己が失われるのではないか、という危惧が示されるようになってきた。さらに、「日本人としてのアイデンティティ」が何を指すのか、という根本的な疑問については明確な答えを示すことなく、ことばが独り歩きしている傾向があることも否めない。

グローバル人材育成の必要性が強調され、そのためのさまざまな具体的な方針や方法が示され、試される一方で、日本人は中学入学時から高校卒業時、さらには大学入学後も英語の勉強と訓練を受けるにもかかわらず、実践的なコミュニケーション能力の習得には程遠い状態で社会人としての生活を始める。英語運用能力の国際比較では教育や経済の水準が低い国より日本の方がさらに低い位置にあることも常に指摘される。どのような目的を掲げ、どのような方針、方法で英語教育を営めば日本の生徒、学生が英語によるコミュニケーション能力を習得し、「グローバル人材」として活躍することができるようになるのか、という課題は教育や国際的なビジネスに関わる行政から教育、商業の領域で長年問題視されてきている。

その表れとして英語教育においては、古くは文学作品の訳読、文法の理解からオーラル教授法、コミュニケーション・ラーニングなどを経て、ALT を活用したイマージョン教育、そして CLIL (Content and Language Integrated Learning) へとさまざまな考え方、方法が試行されてきた。特に現在でも試験的に行われている領域をまだ出していない CLIL については英語以外の、たとえば理科や社会などの教科学習と英語の語学学習を統合したアプローチとして、さまざまな言語活動を通して英語運用能力を高めるのと同時に、当該科目を日本語によって理解することに加え、外国語を通して理解することによってこれまでとは異なる、豊かな理解を導く考え方として注目されている。

しかし、CLIL の考え方を踏襲して展開される授業においては、学習者間や、学習者と教員との関係が「日本的」なものから「グローバル的」(これが具体的に何を指すのか明確にはされていない)な視点へと切り替えられることが求められるとも言える。そうすると、CLIL の方針を取り入れた授業がうまく運用されればされるほど学習者の「日本人としてのアイデンティティ」(これも何を指すのか明らかではないまま)が損なわれるのではないかと、という疑念が生じる。

このような背景の下、芳野弥生は今回の研究で CLIL の考え方の下で展開された授業を受けた高校生にアンケート調査を行い、さらに授業を担当した ALT、CLIL で扱った生物学を担当する日本人教師、また、ヨーロッパで CLIL の授業を受講した経験がある学生にインタビューを実施して CLIL 方式の授業が学習者の認識、特に「自己」に関する認識にどのような影響を与えたのか、という点を中心にデータ収集を行った。また、芳野は CLIL 形式の授業を参観し、教員と学習者、また学習者同士のコミュニケーション活動を観察することによって、複数の視点から授業が学習者に与えると思われる影響に関する認識について研究調査を行った。「アイデンティティ」については、研究者によっては多様に異なる定義、使い方がなされている概念であり、その上位概念を「自己」としてとらえ、この 20 年ほどコミュニケーション学研究的領域で頻繁に使われている「自己観」(self-construal)を中心概念として調査を行った。

日本人高校生 107 人への自由記述のアンケート、6 人の ALT、5 人の日本人教師、EU 諸国で CLIL の方針に基づいて提供された授業を受講した経験がある留学生 12 人にインタビューした。アンケートで得られた 711 の回答から 65 のコードを抽出し、それらを 4 つのカテゴリー(授業へのかかわり方、コミュニケーションに関する認識、学びに対する考え方、モチベーション)に分類することができた。その結果、日本人教師による授業、さらには同一の ALT による英語の授業では間違っことを発言することに対する不安などから授業中はほとんど発言しないにもかかわらず、CLIL の授業では活発な発言、発表をしたり、「同じ」生物の授業でも英語で概念や、普段日本語で使っている名称を説明されることによってさらに理解を深めたり、集中して授業に参加することによってさらに学習意欲が高まり、そして生物、英語ともにさらに学習したいという気持ちが高まったという効果が得られたことが分かった。普段、日本人高校生は集団の中で生活し、相互協調型自己観に影響を受けたコミュニケーション行動をすることが多い一方で、CLIL の授業では独立的自己観を持つ人に見られる行動をしたことが分かった。普段とは違った自己を経験し、いつもは控えた行動をし、さらにその行動から満足感を得ることができた、という点では CLIL 的な授業が日本人の高校生の異文化適用や、異文化理解に肯定的な影響を与えることが示唆された結果となった。

## 【本研究の評価】

今回の研究は芳野弥生が本大学院で博士前期課程の研究を始めた頃から関心を抱き続けてきた日本での英語教育における諸問題、特に学習者間、学習者と教員とのコミュニケーションを通して得られる効果についての研究の集大成と位置付けられる。日本での外国語、特に英語教育については、これまで連綿と続いてきた教育法とその効果に関する議論を中心に、昨今特に強調されている「グローバル人材育成」、またその一環としての「日本人としてのアイデンティティの確立と維持」の問題が実際の教育現場でどのように考慮され、英語教育が実践されているのか、という点で多くの問題提起、新しい教授法の試行、その効果、問題点の評価などが展開されてきた。芳野はできる限り「生きたデータ」を収集するために、県内の高等学校の教員と信頼関係を築き、それを基に授業の参与観察、生徒へのアンケート調査、教員へのインタビューを経て参加した者でなくては語ることはできない経験やそれに対する認識を調査することができたことは今回の研究で高く評価されるべき点である。

これまでに提唱されてきた理論的枠組みとしては Markus and Kitayama が 1991 年に発表して以来多くの異文化コミュニケーション研究や、対人コミュニケーションの異文化比較研究で使われている自己観 (self-construal) の概念を用い、アイデンティティという正確にはたいへん捉えにくい概念を明らかにしようとしている。多くの欧米の人々が自己は一人の人間の内側に存し、自己と他者とを明確に分けて互いが独立した存在であると考えのに対し、多くの日本人が他者との関係によって自己への気づきと維持に努める、つまり自己は他者と自分との間にある、状況、相手によって自己の表現の仕方を相当変える「間人的」行動が多いとする考え方である。この二つの自己観のうち、普段の高校での授業では周囲の目を気にしたり、誤った発言をすることによって自分の立場が脅かされることを不安に感じたりするため、発言をすることはもちろん、教員に質問をしたり、挑戦的な意見を投げかけたりといった行動はほぼ見られないのに対して、CLIL の方針に基づいて実施された授業では普段とは相当異なる授業受講態度が見られたことは今回の研究調査でも特筆すべきことである。それらの行動のきっかけとなり、また行動に意味付けをする生徒の認識をアンケート調査で、しかも授業直後に引き出したことが「新鮮な」データを集めることに功を奏したと考えられる。

アンケート、インタビュー、観察という多面的な方法で資料を集めたのは bricolage 的な研究方法として評価することができる。しかしその一方で、「質的研究には研究者の主観が取り入れられることが許容される」ということが指し示すことを意識し、論文中でも主体と客体との相互の関係や、アンケート結果のコード化、カテゴリー化の過程で採用した論理的整合性についてさらに詰めるべき点が散見されることも指摘しておかなくてはならない。コミュニケーション研究にとどまらず、人間はシンボルを使ってコミュニケーションすることができるからこそあらゆる分野で「研究」という人間のみにも与えられた能力を実践する以上、先行研究調査を経て今回の疑問点に至った経緯、疑問の設定の仕方に関する論理性、研究方法の妥当性、データ処理から考察の展開の仕方に至るまですべての過程でもっと注意して「コミュニケーション」を図ることに注力すべきである。たとえば、CLIL とそれまでに行われてきた英語教育の方針や考え方との違いをさらに明確にして CLIL の意味・価値付けを行い、アイデンティティと自己観との整合性の議論を明確にし、研究方法の正当性をさらに明らかにし、全般にわたって論文中用いる表現を再確認する

こと、などが改善点として挙げられる。

また、コミュニケーション行動ではこれまで常識と考えられてきた「認識→行動」という図式が人間として成長過程の若い段階にいる高校生にも果たして適用できるのか、つまり「行動→認識」という順の方が彼らの行動を説明する上では適切ではないのか、といった深層部の疑問点を浮上させたことも今回の研究によって改めて得られた「副産物」と言える。アイデンティティとは深く関わっていないかもしれないが、今回の研究調査中、複数の高校生が「生物用語を英語で理解したことによって、これまで日本語では分かりにくかったことが分かった気がする」という発言をしたと報告されたが、これこそがCLILが目指す目標の大切な一つであり、このことはCLILを日本人生徒のアイデンティティ感覚の育成や維持のために潜在的な効果が見込める、と位置付けたこと自体に問題があったのかもしれない。この点にほとんど論文中芳野が触れていないことも今後の研究の新たな課題と言える。

以上、論文の書き進め方や書式などの点で今後「保存版」を仕上げるにはいくらかの時間と労力を要するものの、研究内容、研究の規模、新たな視点を見出そうとする態度などを総合的に評価すると、芳野弥生が今後独立した研究者としてさらに知見を深め、増やし、学界に貢献できるだけの能力を有することは今回の研究、および口頭試問の結果十分に証明されたと言える。